

異文化に関する授業実践：宗教に焦点をあてて

Practical Instruction on Foreign Culture: Focusing on Religion

塩谷 もも
(地域文化学科)

キーワード：異文化、異文化理解、宗教、イスラム

1. はじめに

本稿の目的は、異文化に関する科目での授業実践について記述し、そこからの気づきをまとめることである。筆者はこれまで、島根県立大学地域文化学科、それ以前は島根県立大学短期大学部総合文化学科において、異文化に関する科目を担当してきた。最近では異文化ではなく他文化と称されることも増えたが、本稿では、授業内でも使ってきたため、異文化という語を使って記述する。

地域文化学科は人文系の学びを特徴とし、多様な学問領域から、広く文化について学ぶカリキュラムとなっている。日本文化と国際文化の2つのコースから成るが、日本文化コースの方が多数派で、日本文化や出身地など、自分になじみの深い地域に関心を持つ学生が多い。そのため、入学時には異文化に関心を持っている学生の割合は、残念ながらそれほど高くないと思われる。

その中で、筆者は文化人類学概論、アジア文化論（東南アジア）、多文化共生論など、異文化に関連した科目を担当してきた。異なる文化を知ることの楽しさ、異文化に触れて視野を広げることで自文化の見え方も違ってくることが、授業を通じて伝えることを目標としてきた。異文化に関する科目の中で、学生のコメントシート等での反応から、多少なりとも手ごたえを感じてきたテーマの一つが宗教に関する講義、特にイスラムに関するものである。

筆者はムスリム人口が最大のインドネシアを研究対象とし、文化人類学的な視点から、フィールドワークをしてきた。授業の中では、インドネシアでの経験を例として出すことも多いが、その際にイスラムについても触れることがある。本稿では、授業実践の内容と受講生の声、コメントシート等から得られた学生の反応も活用しつつ、これまでの授業を振り返り、今後に向けたまとめを行なう。

2. 一年次科目：文化人類学概論・インドネシア語

1) 文化人類学概論

入学後、最初に授業する異文化に関する授業科目の一つが、春学期の必修科

目「文化人類学概論」である。おそらく新入生にとっては、科目名から内容が想像しにくい科目の代表だと思われる。そのため、初回の授業では、授業内容の概要として海外の文化、いわゆる異文化を中心に学ぶこと、なじみない文化を学ぶことで視野を広げつつ、自分にとって身近な文化と比較することの大切さを伝える。その際に相違点だけでなく共通点にも注目して見ることを、例を出しつつ説明する。授業では、少しでも異文化を感じてもらえるように、写真や映像なども活用している。

例えば 2023 年度の初回授業では、インドネシア・バリ島のヒンドゥー教徒の葬儀の写真から、死のとらえ方の違いと背景にある宗教観を日本と比較し、共通性と異質性を感じてもらおうようにした。また、イスラム教の断食月も例として出し、断食のとらえ方がムスリムと非ムスリムでは、異なることを指摘した。これらの事例を通じて、宗教は異文化について学ぶ上で、重要な要素であることを伝えた。その他にも宗教をテーマとする回があるが、その中では日本の宗教観についても、受講生に考えてもらっている。

特にインドネシアに関する事例は、自分の経験に基づいて語ることが多い。その際、自分が感じたことについても話す、あくまで筆者自身の主観に基づいたものであることを、注意点として加えている。同時に受講生が自ら異文化体験をすることの重要性についても、伝えるようにしている。

2) インドネシア語

春学期と秋学期 1 コマずつの開講で、春学期は初学者を対象としており、秋学期はその続きとなっている。現在、本学松江キャンパスの第二外国語の授業は 4 言語（中国語、韓国語、ドイツ語、インドネシア語）が開講されており、インドネシア語はその中の一つである。

授業では、言語を学ぶことに加えて、文化面についても触れている。特に秋学期の授業では、バリ島の映像資料を使って、観光に焦点をあてた会話の授業もしている。そのため、芸能や日常生活に加え、バリ・ヒンドゥーの信仰や宗教実践についても、学べるようになっている。ただし、語学が中心であるため、東南アジアの文化や宗教等については、二年次科目でより詳しく学ぶようになっている。

3. 二年次科目：アジア文化論（東南アジア）

秋学期選択科目の「アジア文化論（東南アジア）」は、自然環境や歴史・宗教的背景をもとに、衣食住に焦点をあてながら、東南アジアの文化的特徴を学ぶ科目である。全 15 回のうち 5 回が宗教をテーマとしており、イスラムとヒンドゥーをテーマとした講義を行なっている。これらの宗教については、高校までの学びの中で、学習しているため重なる部分はあると思われるが、導入部

分で、信仰の特徴や教義についても復習を兼ねて話すようにしている。

暮らしの中での宗教実践を学ぶことで、日本では非日常のものにとらえられがちな宗教を、日常のものとしてとらえている人々もいることを知ることになる。特に食や衣服と宗教の結びつきは日々の暮らしに直結するため、実感が得やすいようである。このテーマは、日本でのインバウンド観光の拡大、多文化共生にも結びつくものになっている。観光客に対する食事面配慮、空港等の礼拝施設、日本のモスクについても事例から学ぶ。

2019年度の授業では、インドネシアからゲストスピーカーとして、大学教員のムスリム4人を迎えた。授業ではインドネシアの文化について、パワーポイントを使って、紹介してもらった。踊りについては、受講生もその場で立って一緒に体を動かすワーク等も含まれていた。その後、グループに分かれて交流し、さらに日本での観光をテーマに、ゲストの教員たちが島根を訪れて興味をもったこと、印象に残ったこと等を聞き取ってまとめるワークをした。

ワークでは、グループごとにスマートフォンの翻訳アプリ、ホワイトボードなども活用した。学生からは、ゲストの先生方がとても親しみやすかった、話しやすくて楽しかったなどの感想が出た。また、アジア文化論に加えて、4人のゲストにはインドネシア語のクラスにも入ってもらった。こちらもグループで交流してもらったが、大学に入って初めて学んだ言葉を少しでも使って交流ができたことは、とてもうれしいことだったようだ。



【図1：ゲストスピーカーと交流する学生】

なお、本科目の前身となる短大部科目「アジア研究」の授業では、ゲストスピーカーを呼ぶことはできなかったが、エッセイに基づくレポート課題を出した年があった。文章を通じて、少しでもイスラムと暮らしに触れてほしいと考えた。課題図書は人類学者片倉もとこ氏の『ゆとろぎ』（片倉2008）で、アラブ世界を舞台に、イスラム教徒の生活や価値観を綴ったものである。直接話をするには及ばないが、レポートからは学生のイスラムに対するイメージ変

化がうかがえた。

4. 三年次科目：ジェンダーと文化・多文化共生論

1) ジェンダーと文化

ジェンダーに焦点をあてながら、文化について学ぶ科目である。授業では5回が宗教をテーマとするもので、イスラム、ヒンドゥーと仏教をジェンダーに焦点をあてながら学ぶ。イスラムについては、ヴェール、結婚と家族についてがテーマの中心となる。ヴェールは一般的な意味を学んだあと、筆者のインドネシアでの調査結果も活用し、東南アジアの事例について学習する。ヴェールは、実物をいくつか教室に持参して説明し、写真や映像も使った。

ヴェールについては、中東式の黒い布で全身を覆うイメージが学生にはあるようで、インドネシアの色とりどりで形も多様なヴェールは新鮮に映るようだ。また、時代ごとの変化や流行もあるなど、自分たちと同じでおしゃれをしたい気持ちもあることに親近感を覚えていることも、学生コメントシートから伝わってきた。

授業では、東南アジアのイスラムと比較する意味もあり、サウジアラビアの映画「少女は自転車に乗って」も活用してきた。この映画では学校や家庭でのシーンが多く、ムスリムの日常生活の様子を知ることができる。グループワークで、映像を通じての気づきを話し合うこともしてきた。映画を通じた疑問点をヒントに、イスラムに関するテーマを設定し、調べて文章でまとめるレポート課題も出している。テーマは多様で、映画の主題の家族、結婚、恋愛、さらに衣服や食について調べる学生もいた。なお、本科目はカリキュラム改定により、2023年度が最後となった。

2) 多文化共生論

この科目は、多文化共生に関わる活動をされている外部講師に来ていただき、講義をもとにグループワークを通じて考えることが中心になっている。多文化共生は広い範囲を含むが、授業では日本に住む外国人住民に関する内容に焦点をあてる。日本での暮らし（行政やNPOの取り組み）、学校教育、日本語教育、難民問題、やさしい日本語の取り組みなど多様なテーマの一つに宗教（イスラム）を設定している。

宗教に関する回は2回あり、筆者が講義を担当する回、島根在住のムスリムのゲストスピーカーの講義回から成る。筆者の担当講義では、日本の中でのイスラム、特にモスクをテーマに扱うことが多い。モスクを含めた各宗教施設が信仰の場であるだけでなく、外国人住民をつなげる場となっていること、同時に日本在住のイスラム教徒と日本人をつなげる場となっていることを、映像資料等も活用して伝える。

2023年度の授業では、授業はじめに2人1組で、1本のペンを使い、口をきかないというルールのもとで協力し、制限時間内にモスクの絵を描くワークをアイスブレイクに行なった。これは数回前のゲストスピーカーが同じ形式で家を描くワークをしていたのを活用し、テーマをモスクに変えて試みたものである。ワークでは予想していたよりも、多様なモスクが仕上がった。モスクを描いた29点の作品を回収し、授業内でも数点取り上げて解説をした。

提出された作品に一番多かったのは、ドームやそれに似た形の屋根がついているモスクで、約半数の15点がこれにあたる。周囲にヴェールをつけた人や、礼拝する人を描いているものもあった。尖塔を加えるなど、モスク建築の特徴をさらに出しているものも数点見られた。

また、6点はイスラムの聖地メッカのカーバ神殿を描いたと思われるもので、正方形の建物と周囲に人が描かれていた。4点はとがった三角屋根の建物で、やはり周囲に人が描かれているものだった。残り4点は丸形の建物など、より抽象的にモスクが描かれたものである。

もちろんこのワークは正確に描くことが目的でなく、モスクの建物イメージを各自思い浮かべてみるのが目的である。さらに、それを2人で協力して形にしてみることで、モスクについて学ぶ前に、少しでも興味を持ってもらう試みでもある。絵を描いた後、授業内で日本にあるモスクの写真を見ることで、ビルを活用したものなど多様なモスクがあることも知る。そのことで、ドーム型のモスクだけでなく、一見するとカーバ神殿のように見えた正方形の建物、それ以外の形でモスクを描いた作品も、実は日本にあるモスクと似ているものがあるのを実感できたはずである。

一方、ゲストスピーカーを招く回は、島根モスク代表であるバー有正ベンサード氏（以下バー先生と記述）にお願いしている。バー先生は西アフリカのギニアのご出身で、30年ほど松江に住まれている。



【図2：イスラムについて講義を行なうバー先生】

講義後の質疑応答の時間は、ムスリムの方に知りたいことを日本語で質問できる貴重な機会であり、多くの質問が出る。宗教実践の細かな内容やそれが持つ意味、ムスリムの恋愛や結婚、食文化についてなど、これまでの異文化に関する授業で学んだことも含めた質問がなされる。また、例えばモスクにムスリム以外の人が入ることについてどう考えるかなど、ムスリム側の視点についての質問が出ることもある。

多文化共生論では、講義をもとに授業で扱ったテーマの中から1つ選び、そのテーマについて調べ、まとめた内容をもとに考えるレポートが期末課題として課される。その中で、宗教（イスラム）について、選択した学生もいる。例えば今年度のレポートでは、日本のモスクの現状、ムスリム墓地（日本と海外の状況）、日本で暮らすイスラム教徒の生活面での課題（ハラール食、学校給食、通学時の服装）などがあった。

5. おわりに

受講生に宗教（特にイスラム）に関する授業は、どのようにとらえられたのだろうか。大きく2つのポイントがあると考えられる。一点目は自らが持ってきたイメージ変化について、二点目は日常と宗教の結びつきについてである。

一点目のイスラムやムスリムに対するイメージ変化については、コメントシートに記述する学生が少なくない。それは授業を受講する前に宗教、特にイスラムについて、かなり偏ったイメージを持っていることが多いためだと考えられる。なかにはストレートに、イスラムに対しては怖いイメージがあったが、それが薄れたという内容を書いているものもあった。

ヴェールに関する授業からは、おしゃれの一面もあることから、自分たちとの共通点が感じられたことで、身近に感じられたと書いている受講生が複数いた。さらに前述のバー先生のイスラムに関する講義やインドネシア人ゲストスピーカーとの交流は、ムスリムと接するのが初めての学生も多いため、イメージ変化に大きな影響力を持ったと考えられる。

もう一つのポイントは、日常と宗教が結びついていることへの気づきである。これは、アジア文化論をはじめ、授業の中で伝えたいと考えてきた目標の一つでもある。コメントシートには、イスラムの宗教実践は絶対的なものだと思っていたが、例えば断食や礼拝も柔軟性があることを知り、印象が変わったという記述があった。

同じムスリムでも地域差、個人差があることを理解できた、と書いているものもあった。また、戒律等だけでなく、それがどのように実践されているかを学ぶことの大切さを指摘したものがあった。異文化でのマナーや習慣の違いのように、柔軟な視点で宗教をとらえることは重要である。

海外に行かなくても、今日の日本においては、様々な理由で日本に住む外国人住民の人々が増加しており、外国人旅行者の増加も顕著で、その中にはムスリムや他の宗教を信仰する人々も含まれている。こうした状況の中で、宗教について知っておくことは非常に重要かつ不可欠なことである。その人々にとっては、宗教は食や衣服を含め生活に直結することで、日常の一部となっている。

授業内で、自分の経験を織り交ぜて語ることは今後も続けていきたいと考えるが、さらにそれを文章化することも試みていきたい。自分で書いたエッセイや記事は授業内でもいくつか活用してきたが、文章でまとめたものがあると伝えやすく便利だった。また、イスラムや他の宗教を含め、異文化について書かれた一般読者向けの出版物は、授業でも参考にしてきた（積・細川 2018、室橋 2023）。異文化に関する記述をまとめ、発信することは社会貢献にもつながりうるため、今後もエッセイを書く努力を続けていきたい。

さらに受講生が外国人住民の人々と授業内で接する機会は今後も継続し、可能であれば増やせたらと考えている。ただ、本当のところは異文化について知る一番の手段は、現地に行くことである。本学で筆者は短大部時代に「アジア文化演習」という科目で中国・韓国研修を3回、アメリカ語学研修の引率を2回担当した。いずれも1週間～2週間とそれほど期間が長くないものであったが、受講生が研修中に大きく変化・成長するのを見るのは毎回楽しみであった。これらの研修は、初めて海外に行く学生も多く含まれており、受講生が異文化に初めて接する体験に同行することは、筆者にも多くの気づきをもたらしてくれた（塩谷 2017）。

今後、地域文化学科の学生を対象に、インドネシア（バリ島、ジャワ島を予定）で約一週間の海外研修を実施する科目「アジア文化研修」の開講を目指しており、準備中である。受講生は学習したインドネシア語も活用しつつ、異文化に関する科目で学んだテーマを現地で体験することで、多くのことを吸収してもらいたいと考えている。これまでの異文化に関する授業実践をふまえ、今後も科目内容と研修内容について検討しつつ、科目の設置・海外研修の実施に向けて努力していきたい。

【参考資料】

- 片倉もとこ 2008『ゆとろぎ：イスラームのゆたかな時間』岩波書店
塩谷もも 2017「海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』56：179-190
積徹宗・細川貂々 2018『異教の隣人』晶文社
室橋裕和 2023『北関東の異界エスニック国道 354 号線：絶品メシとリアル日本』新潮社